
勇者の嫁になりたくて (*) ダ 3

千海

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の嫁になりたくて（＊）ゞ 3

【Zコード】

N6124Z

【作者名】

千海

【あらすじ】

わたくし、ベルリナ・ラコット。18歳。ファンタジーな世界に前世の記憶を持ちながら転生しました。生まれた先は孤児でしたが、前の記憶と授かった特殊スキルのおかげでまたり都会暮らしを堪能。そんなある日、運命の人出会います。それは俗にいう勇者様ミーハー心で人だかりをかき分けた先に彼を見つけた時、私は一目見て確信しました。この人こそ私の運命の人なのだと。追っかけ女のラブコメディ、3話目です！

(前書き)

小説説明に書いてありますが、前作「勇者の嫁になりたくて」（
*）の3話目です。

1、2話目を読まなくとも雰囲気で付いていけると思いますが、前
作を読んで頂けると話の内容がわかりやすいと思います。

「すまない。火種を貸してもらえないか?」

「あ、はいー。どうぞ。付け方わかりますかね?」

「ああ。“着火男”だなんて珍しいものを持つてるな」

「ええまあ。“着火女”とどちらを買おうか迷ったんですけど、故郷の思い出があるので…」

背後から声をかけられ火種グッズを渡そうと振り返ったところで、私は顔の造形がえらく整った牛乳紅茶色な御仁にギョッとして声が消えかけた。気を取り直して“着火男”という名のついた製品を渡すと、その人は興味深そうにそれを手の中で転がした。

いやはやまつたく。

改めてここが遠い記憶と余りにもかけ離れた世界なのだと想い出す。

ツヤツヤのミルクティーに焦がしキャラメルを配置した大層な男前。勇者様と同じベクトルの匂いがするが、配色如何でこいつもタイプが違つて見えるのかと感心する。

* * * もはや後光を纏つてる域だわー * * *

この世界の美形上限ってどうなってるんだろう、と物思いにふける私。

名前をベルリナ・ラコットといづれ、じく普通の18歳。

・ · · · ·

ええと…。

既に「存知かもしけませんが、容姿 凡庸、性格 至つて正常、な「ぐぐぐく普通の女子なのですが…」。

実は私、異世界からの転生者。記憶もそのまま持ち越しです。

* · · * · · * · · * · · *

「こんな森の中に若い娘が一人きりでどうしたのかと心配したが、こちらの思い過ごしのようだな」

そう言つて、ミルクティーな男前は持参した棒の先に“着火男”が起こした火を馴染ませる。

「離れたところに居ないでもつと仲間の側に居た方がいい。ここはもうフィールド・モンスターが徘徊する土地だ。…まさか、喧嘩したとかそういう理由でか？」

訳ありのパーティつて意外と多いんだよな…とぼやきながら、その人はこちらが拍子抜けするほど短時間で火種をものにした。どうやらあらかじめ油をしみ込ませた布を巻いていたようだ。

? ? 手際良い人だなあ。こう、いかにも熟練の冒険者ですーつて感じで。

印象深い髪の色と美味しそうな瞳の色から視線を離して全体を眺めてみれば、体つきもしつかりしていて所作の一つ一つにキレがあ

る。腰の後ろに大型のシースナイフ（鞘が必要な折り畳まないタイプのナイフ）を2本と、前合わせの長衣がはだけた足下にブーツナイフが見える他は、シンプルなデザインのワンショルダー（背中に斜めがけできる鞄）一つと無駄な装飾も荷物もない。それはつまり多くのものを持つ必要がないということで、強さは折り紙付きですよと言っているようなものだ。まあ、一口に冒険者といつても多種多様なので一概にそうとは言いきれないけれども。

もしかしたらその筋では有名な人なのかもしない。次の街にいたらギルドで聞いてみようと思いつつ、悪い人ではなさそうなのでこちらの事情をかいづまんて説明する。

「何だかご心配をおかけしたようですが、大丈夫ですよ。ただ、あそこにいる人たちとパーティを組んでいる訳ではないので。もともと一人旅ですし、今は番犬も居ますから」

少し前にエディアナ遺跡というダンジョンの地下で出会った魔婦人より譲り受けた黒い魔獣を指差すと、彼（？）はこの話を理解したかのようにタイミングよく一声をあげた。

そして話を戻すように、およそ10メートル先で焚き火を囲む彼らの方に目を向ける。

「一番右側に座っている黒髪短髪で前髪がちょっと長めの人、見えますか？すごくカッコイイ男の人。私、あの人の追っかけやつてるんですね。^{キャラリア}だからこうして物陰から覗き見るのが日常で。こう見て3年の経験があるんですよー。？？？つまり、何も問題ありません」

ふつふーん、と胸を張つて言つとその人はわずかに沈黙し、次にはクックツと笑いをこぼした。

「それは邪魔をして悪かつたな。私はレックスという。君の名前は？」

「ベルリナと言います」

「ベルリナ…もしかしてベルリナ・ラコットか？東の勇者の後をダンジョンの中までも追いかけていくといつ…なるほど。じゃあ、あれがその勇者なのか」

何か思い当たる節があつたらしく、彼は一人で納得すると再び黒髪の勇者様に視線を向けて頷いた。それを今度はこちらに向けて、年頃の娘が見たら思わず目がハートになりそうな極上の笑顔を浮かべながら言つ。

「こんなところで有名人と知り合えるとは。ベルと呼ばれるのは嫌だろうか？」

美形は美形でも男性寄り。そんな男のからりとした嫌みも含みもない笑みに、構えた心が不思議と解かれていくを感じる。

「いえいえ。そちらの方が呼ばれ慣れてますから構いませんよ」

むしろフルで言われると「あ、私のことか！」と未だに焦る時がある。前世の記憶が残っているということは絶対的に他者より優位といつわけではなくて、やはりそれなりに弊害を生じるものだ。

「そうか。また会う事があればそう呼ばせてもらおう。今夜はあまりモンスターの気配を感じないが、背後には充分気をつけるんだぞ」

着衣の下の引き締まつていそうな四肢から立ち上る野性味を、臭うではなく香ると言わせる端正な面立ちの男は、火を灯した棒を持ち直すと落ち着いた足取りで森の中に消えて行つた。

それを見送つて、再び愛しの勇者様に熱い視線を送るべく体を向き直す。と、不意にその人と視線が重なる。

刹那、私の体は骨の芯から固まつた。

一体何が起きているのか。

処理不能に陥つた頭の隅で疑問だけがループする。

灰色の瞳がゆっくりと逸らされていくのを目で追いながら、段階的に体の機能が復活していくのをおぼろな感覚で捉える。深い、深い息を吐き出しながら2本の腕で硬直した体を支えていると、黒い魔獸が心配そうに身を寄せてつぶらな瞳を向けて来た。

？？お、恐ろしい……やはり勇者様の眼力で私は死ねるっ！！……
えへっ 目が合つちゃつた ついにこの灼熱の想いが届いたのかしら（はあと）

急に人が変わつたように「デレ、デレしながら身をくねらせる主人に嫌気がさしたのか、魔獸はしつぽを一振りすると、さっさと元の場所へと戻つていった。まるで「ああ、いつものあれね」とでもいうように、慣れた様子で体を丸め目を閉じる。

勇者様と目が合うという珍しい体験をした私は、寝袋に身を収めた後も心の奥のこそばゆい感覚に若干の混乱を混ぜ込んでウネウネ動き、いつもより遅い時間に眠りについた。おかげで、翌朝目覚めると既にそこには彼らの気配が微塵もなくて、ほんの少し寂しい気分に浸つたが。

まあ、いつもの「」とく問題ない。

例え広いフィールドで行方を見失つたとしても、この搖るぎない愛がいざれ彼のもとへと私を導くのである。

？？ 捜索スキルもMaxだしね！

* · · * · · * · · * · · *

勇者パーティは、エディアナ王国より西方に向かうルートの一つであるシリカーナ・ロードを少し南に下った辺り、平原と森を繰り返すフィールド“ウイリテ”を南西の方に進んでいた。目的地は山間に位置する“フウ”と呼ばれる小さな村だと思われる。

私はそのフィールドをいつものペースで歩きながら、彼らの後を追っていた。

基本無口、無表情なイケメン勇者様を追いかけ続け早3年。彼に近づきたくて何かきつかけが掴めないかと毎日遠くから眺めている内に、さりげなく人を避けるような態度や何かに失望しているような視線の冷たさに気づいてしまった私は、当時、それ以上踏み込むことを躊躇つた。

できれば話をしてみたい。けれど、いざ本人を前にしてみると、声をかけるなど畏れ多いというような気がしてしまい…。そんな、意中のアイドルを前にした時のような感覚が邪魔をして、今までずっと離れた場所から眺めているしかできなかつたのだ。

それがつい最近、森系ダンジョンでボス戦の手助けをした辺りから、何かが少しづつ変わり始めているような気がするのは、きっと気のせいなどではないはずだ。キスをして、お姫様抱っこを経験して、と。こんなことを他のファンが知つたら嵐に混ざり刃物が飛んできそうだが、ふとした時にとても距離が近づいていたり、甘い雰囲気が漂う機会が増えたのは、私達の関係が確かに変わってきているという証拠なのだと思います。

それでも、遠くから眺めているだけというスタンスは基本的に変わらない。なぜならキスは挨拶で、後者はただの親切なのだということを、私の理性はちゃんと理解できているのだから。嬉しいのは私だけ。幸せなのも、私だけ。それは確かに心を満たすものだけど、その全てを満たすためには彼を感じる幸せな気持ちというのが必要

で。決して独りよがりのものじゃなく…できれば私の存在が、彼にそれを生じる起点であつて欲しいと思うのは。高望みかもしけないけれど、生涯の目標でもあると思えば、きっと、そのくらいが丁度いいはずだ。

まあ、黄昏るのはこのくらいにして。

実際問題、あと10メートルという物理的な距離をつめなければ、勇者様の嫁になるためのスタートラインにも立てないのだし。

魔獸のおかげか、繩張りに侵入してもこちらに向かつてこようといないフィールド・モンスターを遠目に見つつ、平原を突き進む。今までには、逃げて隠れて仕方なしに応戦してと、モンスターが涌くフィールドの移動はそれほど楽なものではなかつたのだが。

? ? エンカウント減少つて素晴らしい時間短縮できるのねーこれならいつもより早く勇者様に追いつけそう

帝国の大図書館で得た知識によると、どんな魔獸でも生まれつき“威嚇”というスキルを所持しているそうなのだ。それには“自分のレベル以下の同類やモンスターを寄せ付けない”という効果があるらしい。余談になるが、ある一定のレベルに達すると“闘争本能”的のスキルが発生し、実力に圧倒的な差がない場合、レベル依存の“威嚇”に対抗する効果を發揮して、戦闘可能となるらしい。魔種の序列は完全なる実力制なので、“闘争本能”は下克上のための必須のスキルと言えるだろう。

そもそも、パシーヴァのレベルは一体どのくらいなのだろうか？まあ、あの魔婦人は自身をコウ爵位だと言つていたくらいだから、少なくとも侯爵で、ともすれば公爵だ。魔種の序列で爵位を持つといふことは相当な実力者であるということなので、その使い魔とうならばそれなりに高いのだろうと思えるが。

？？嫌な特殊スキルだけど“女難の相”を持っていてほんと良かつたね、フィールくん。あの女性は今の君が足搔いたところで、到底勝てない相手だったのだよ。それはもう時間稼ぎができたのが不思議なくらいにね。

やや不健康そうな象牙色^{アイボリー}の肌に白群（びやぐぐん・群青色に白を混ぜた時の色）の糸が映える少年を「伴侶」と明言した麗しい魔婦人の姿を思い出しながら、遠くの空へと合掌する。一緒に居て思つたが、あの雰囲気はヘタレな予感だ。押し掛けられ系ハーレムを築いていくのが何となく目に見える。次に会った時、今度はどんな女性を連れているのやら。…しみじみ思うが、他人の苦労はヒトコトだ。

そうして様々な事に思いを馳せながら進んでいくうちに、いつの間にかフィールドは平原から森へと変化していた。

日没の時間もとうに過ぎており、闇色が段々深くなつていく。

？？ん？

霧が立ち始めた宵闇の森の中を進んでいると、妖怪アンテナならぬ勇者様アンテナがピンと立つ。ようやく彼の位置情報をより正確に感じ得る距離までつめることに成功したようだ、と誇らしげな気分に浸りながら、私は彼の気配が増していく方へと歩みを進める。黒い魔獣は道草を挟みながら、主人の姿が見えるかどうかという距離でひょこひょこと付いて来る。

エディアナ王国の城下町を出立してから何となく気づいた事だが、どうやら彼（？）には久方ぶりの地上の姿が物珍しく映るようなのだ。あちらこちらをジッと見つめでは、駆け出したい衝動を必死に我慢しているという素振りをよく見せた。ステータスに刻まれた従属の一文字によつて私は彼を好きなようにできる訳なのだが、正直、

望むことなどない。巨大化してもらい、その大きな背中に乗せてもらって移動するという手もあるのだが、せっかく3年もの月日をかけて得た体力が失われるのは勿体ないと思うのだ。どうにも動けなくなってしまった時にそししてもらつてこうことで、とりあえず私の命が危なそうになつたら守つてね、あとは好きにしていい、と命じる事で今に至るという訳だ。

そうして、露をまとつた草木のせいで衣類の裾がじんわり湿りだした頃、視線の先にぼんやり揺れる光を見つけた。こんな森の中にはもあるのだろうかと、童話に出てくるよつた世俗を捨てた魔女の姿を思い浮かべながら近づいて行く。

着く頃にはそれが家より館と呼ぶに相応しい建物だということが見て取れた。いくつかの窓からはランプの明かりが漏れており、私はそれの正面で果然と立ち尽くす。

？？困つた。勇者様はこの屋敷の中に居る。居るんだけども…

いの館、明らかに普通じゃない。

壁を覆うツタの葉が所々不気味に揺れているのが、玄関先に灯されたランプの炎は揺れてない。いくら風よけのガラスに守られているといつても、ランプには空気取りの穴があるのだ。あの葉っぱの揺れ具合から推測される風の強さなら、内部の炎は揺れていい。なのに何故揺れぬのか。まさかのイミテーションかコラ！と内心悪態をつきながら、恐る恐る玄関先へと向かつて行く。ちなみに風が吹いていないという想定はしていない。風がないのにツタが揺れるなんていうのは怖すぎるるのでボツなのだ。

？？あああ…ヤダなあ…ホラーはダメって言つたじゃん…………（

涙目）

あからさまにお化け屋敷な雰囲気漂つお館の無駄にでかい扉を押

すと、ギギギイと耳に残るあの音がして、薄暗いエントランスが視界いっぱいに広がった。その中央で全長2メートルほどの巨大な風見鶏が体を横たえ、首をあらぬ方向へ折っている。

? ? ひいいいいいつ一何なのこの気味の悪いオブジェクトく（;
< >）へ誰も居ないしー居てもヤだけど！ こ、怖いようううつ
！！！

「どうする？ また同じことに戻ってきたみたいだけど」

萌葱色のボブカットの少年がエルフ特有の長い耳を搔きつつ面倒くさそうに呟いた。

「困ったでござる…」

真っ白い兔耳をひこひこ動かしながら、3つの星を頂いた杖を持つ老齢の魔法使いが続けて言った。

「どうしようねえ。こういう時ベルが居ると助かるんだけど…まだ近くに居ないようだし」

青銀の髪を強力なワックスで固めたように逆立てた美中年が、のほほんとした口調で続ける。

「…役立たず」

パーティ内の紅一点にも関わらず勇者ばかりの無表情を發揮している金髪ポーテールの少女が、珍しくあからさまな非難を浮かべ抑

揚の薄い声で言つ。

5回目の中を柱に刻み付けながら、黒髪の勇者は今までに通つた順路を思い出す。なるべく通つた事のない廊下を選び、そこにあつた階段を上り下りしたのだが、結局同じ場所へ戻つてしまつただ。

突き当たりである6階を除いた全ての階が同じ造りになつてゐるのもこの混乱を招いている原因の一つであるが、歩きながら頭に入れた屋敷の見取り図では特におかしいところはない。いや、おかしいところがあるためにこうして2時間半ほども屋敷の中を行つたり来たりしている訳なのだが…。

「入り口があつたのだから、出られない訳はないはずだ。問題は1階と2階をむすぶ階段がどうやら消えているということ…誰かそれらしい仕掛けを見なかつたか？」

「…ない」

「ううむ…某は壁の染みくらいしか見た覚えがないでござるよ」

「4階の廊下のランプの一つが、ついたり消えたりしてたぐらいかなあ」

「いつそ2階の窓から飛び降りた方が早いんじゃない？」

各々が意見を述べる。

確かにレップスの語る壁の染みは自分も見かけた。進路を決める印にしていたからだが、飛沫が点々と散つていただけでそれが文字であつた訳でもないし、意味を持つような何かの形を成していた訳でもない。

ライスの言う4階の点滅を繰り返すランプも覚えているが…その辺りには見慣れた壁とドアがあつただけで、仕掛けとなるような何かが置かれていた記憶がない。

いよいよソロルの言う事がもつとも得てているような気分になるが、果たしてそう上手くいくかどうか自信が持てない。女性の悲

鳴が聞こえた気がして入ってきた時には特に何も感じなかつたが、こつして実感してみるとそれがよくわかるのだ。

「試しにそここの部屋に入つてみてみるけど、いい?」

答えないこちらの態度に業を煮やしたのか、萌葱色の髪を搔きながらソロルが一番近い部屋を指す。

ものは試しだ。やる前から否定的になつては何も解決できないと、向けた顔で一つ頷く。

それを確認したソロルが部屋の前まで歩みを進め、ドアノブに手を掛けたところでピタリと体の動きを止めた。

「…邪魔だな」

小さく舌打ちし、ドアノブに乗せた手を扉の方に移動する。

「r e q u i e s c a t i n g p a c e」
レクイエスカット・イン・ペース

緑光を放ちながら扉に刻まれていく非対称な魔法陣はエルフが神聖視する古語の組み合わせだと言われているが、それはもはや文字をただ綴つただけとは思えない芸術的な美しさを持つ代物だ。

ドアの隙間から同じ色の光がこちら側に漏れ、ゆつたりと収まつた後に、彼の手が再びドアノブに乗せられた。扉は何の抵抗もなく開き、ソロルは躊躇いなく室内へと足を踏み入れる。

それに続いてメンバーが次々とその部屋へ入つて行く。

「意外と綺麗な部屋だなあ。ホコリなんかも殆どないし」

感心した声でライスが呟くと同時に、窓の方から憎々しげな声が響いた。

「何で開かないんだよ。」

やはりそうかと思いつつ、そちらのほうへ目を向ける。持てる限りの力を込めて木枠を押し上げようとしているが、ピクリとも動かない。

「ソロル、代わるう

パーティ内で最も力が強い自分が試してダメだというのなら、全員が納得するだろう。立ち位置を入れ替えると、ガラスをはめ込んだ木枠に手をかけ、壊さない程度に力を込める。

「やはりダメだな。窓は開かない

「困ったねえ」

「最悪、夜明けまで待てば出られるはずだ。休憩しながらどうするか話し合おう」

「ちょっと待つた。なんで夜明けまで待てば出られるなんてわかるんだよ？」

訝しげに問うソロルと、興味を持った様子のベリル、既に理由を察しているという顔をしているレプスとライスを確認し、その説明を始める。

「めったに会えるものじゃないが、おそらくこれはホラー・ハウスと呼ばれるものだと思う

「ホラー・ハウス？」

「死靈^{ゴースト}や生靈^{レイス}が徘徊する神出鬼没の疑似ダンジョンだ」

聞いた事がない、という顔の彼らに最も年高であるレプスが補足

を入れる。

「話題に上るのは数年に一回くらいのペースで“じざる”が、経験を積んだ冒険者の間では有名な話で“じざる”。某もこのパーティに入るまでは冒険者としてあちこち飛び回つたで“じざる”が、こうして実際に目の当たりにしたのは初めてで“じざる”よ。」

「オレも話には聞いた事があるけど、初めてだなあ。謎を解かなきや出られないらしにけど、解けなくても日の出を迎えると自然消滅するそうだよ。」ゴーストやレイイスとは滅多に戦闘にはならないと聞いたけど……」

以前、働いていた職場で噂になつたことがあるのだ。ライスとは同じ職場だったので、その話を覚えていたのだろう。

「彼ら、人を驚かすのが生き甲斐らしいから」

ははは、といつもの笑いを浮かべながらライスに、ソロルが思いきり顔をしかめ苦々しく呟く。

「だからか。廊下はそんな気配ほとんどないのに、ドアに触れた途端、部屋の中でものすごくざわめいたんだよ。不快だから消したけど」

先ほど彼が使つた魔法は、アンデッド系のモンスターが出現するダンジョンでよく使われるものだ。どうやらゴーストやレイイスが対象でも効果を發揮するらしい。エルフが使う魔法は多種族が用いるものより圧倒的に数が少ないが、効果の範囲が広いものが多いのだ。各々がベッドやソファー、背の低い家具に体を預けつつ、ぎ始めたのを確認し自分も壁に体を寄せると、アイテム袋が縫い付けられた胸ポケットから水を取り出し一口それを飲み込んだ。

「謎解きをするか、田の出を待つか、どちらが良策でござるうか。こういつては何でござるが、謎解きが得意な人物はこのパーティには居ないよつて思つのでござる。ベル殿なら何とかなりそうなのでござるが…」

干し野菜をかじるレプスの言葉を耳に拾つて、思わず言葉が口をつく。

「彼女は感が鋭そだから、この屋敷には入つて来な「そんなことないですよ！……やつと着いたところです！」…」

言いかけたセリフを遮つたのは、いつの間にか見慣れてしまつた一人の少女。ドアにしつかりしがみつき泣きそうな顔をしながらも、体を半分のぞかせて必死にこちらを見上げる様に一同の視線が釘付けられる。

「た、たとえ火の中水の中、お化け屋敷の中だつて！大好きな勇者様が居るのなら、ちゃんと付いて行くんですからっ！…ここ怖くなんかないですよ！透き通つた足だけとか手だけとか頭だけとか火の玉とかポルターガイストとかも見ちゃつてここまで來るのにすごい怖い思いしましたけど！全然怖くなんてないですからね！？勇者様が居るのなら、そんなもの克服できるんです！…愛は偉大なんですよ！…！」

冷静に聞いていると矛盾を含む発言なのだが、なんだかんだといつも落ち着いている風の姿からかけ離れたようなその態度に、堪えきれずに口元が緩んでしまうのを感じる。“失意の森”でアンデッド系のモンスターを見た瞬間に態度と顔色が反転したので“そう”なのかと思ったが、まさかここまでとは思わなかつたのだ。それを

乗り越えてまで付いて来るのは確かに愛は偉大だなと思つたところ
でようやく我に返り、緩んだ口元を引き結ぶ。

改めて視線を向ければ彼女はポカンとした顔をしていて、思わず
とはいえ笑つてしまい悪い事をしたと申し訳ないような気分になつ
たが、こちらが謝罪する前に気を取り直し、状況を思い出したとい
う顔で右手を上げた。

* · · * · · * · · * · · *

「出ませんか！？こんなところ早く出た方がいいと思つんですよ！
たぶん私、出口わかりますから！！」

シユタツーと右手を上げて提案すると、メンバーは各自の顔を伺
つた。

お化け屋敷で一人きり、という大変心細い状況を打破した私は精
神的に余裕ができる、薄暗いけど嫌な気配のない室内に、驚き半分、
安心半分、で足を踏み入れる。

それを田ざとく見留めたソロルくんが、こちらの方を向いて言つ。

「いつもの距離ってボリシーなんじゃないの？」

「だつてこの部屋お化け居ないんですもん！」

「ああ。僕が消したからね」

「えー？ ソロルくんつて先駆者職スカウトなのに除霊までできるんですか！」

大変感動を込めて「う」と、いつものよつと盛大に眉をしかめた少
年がそこに出来上がる。

「お前今まで何見てたんだよ！？僕は聖職者だ！！大体、スカウ
トは職業じゃなくてスキルだろ！」

「え、聖職者なんですか。いつも勇者様しか見てないので知りませんでしたよ」

さすがに盜賊シーフに見えたなどとは言えなかつた。たまに視線を向けると短剣をいじつている率が高かつたのだから仕方ない。それはもう自業自得の四文字だよねと、一人で首を縊にふる。

？？それに聖職者といえば回復魔法ーーって感じだけど、使つてると
こ見た事ないしーー（）、（）

尊大な態度でそんな風に思つてゐるが、こちらが何を考えていたのか直感で悟つたという顔をして彼が続ける。

「回復魔法くらい普通に使えるーそもそもこいつら大怪我したことないんだよ！」

あ、そう言われてみれば確かに、追っかけ始めてから大怪我したの見た事ないです……はあ、そうですかあ。ソロルくんてば聖職者さんだつたんですねえ。で、除霊もできる、と…これはもうソロル様と呼ぶしかなハジやないですかー

「ふつ。ようやく僕の偉大さがわかつたか。
「ははーっ（シ）ー（シ）
許す。
敬え。平伏しろ」

「…………盛り上がりつてこると」の懸念が

部屋の入り口で閑談を続いていると、話をまとめたらしい大人達がこちらの方を真剣な眼差しで見つめていた。

ハ、と私は遅かったソロリくんが随分いたたまれない様子で壁に拳をぶつけているが、大人な私はそれを見事にスルーした。

「出口まで案内を頼めるか？」

とても低い、それでいて味わい深いイイ声が耳に届き、私は一気に
につつとりとした気分に浸る。

だが、ここで言わねば女がすたるーと流れされそうになる意識をか
き寄せて、右手を上げながらその意思を表明する。

「 もちろんですー喜んで案内させて頂きますーーー

熱烈歓迎指名感謝万歳三唱な私は、意氣揚々と“銘入り高級革袋
”からブツを取り出した。

「 さあ、着火男のチャッキーさんー出番ですよー」

ワラっぽい素材で出来た体長約15センチの人形は、昨夜も大活躍を見せた火種アイテムの一種である。

それを握りながら部屋を出て、取り付けられたボタンを触る。チャッキーさんは手の中でモゾモゾ動き、ほどなく体を落ち着けると頭から火を噴いた。

「じゃあこきますよー」

彼らが背後を付いて来る気配を確認しながら、着火男の頭部に灯った火を頼りに、私は薄暗い廊下をどんどん進んで行く。火が折れたらそれが示す方向へ。部屋を指したらソロルくんに除霊してもらつた後にドアを開け、1階にもあつた同じ仕掛けのそれをいじる。出口を切り取られたループする屋敷の中を、下から上に、上から下にと移動して、部屋の仕掛けをいじるのにも飽きてきた頃に、ようやく最上階の物置部屋で意味深な鍵を手に入れた。

「 たぶん、これでグランドフロアまで下りられるはずです

1階には一力所だけ鍵が掛かっていて入れなかつた部屋があつたのだ。最後の部屋はそこだろう。

「なあ、何でそんなことわかつたんだ？」

除靈じょりをこなすうちに立ち直つたらしい聖職者様が、不本意ながらも感心したといつゞ様子で問い合わせてきたので歩きながら返事を返す。

「玄関に下がつていた風が吹いても揺れない炎が入つたランプと、エントランスの壊れた巨大な風見鶏、地下室の“僕を見つけて”つていうメッセージから連想したのがこの仕掛けです」

未だ炎を頭に灯したままの着火男をぐいっと背後に見せつける。ダンジョン系のゲームでも、脱出系のゲームでも、全ての部屋を確認しないと次のフロアへ進む気にはなれないという性格なのだ。もちろんアクション系やロールプレイング系で地図埋めなんかがあつたりすると、隅つこの隅つこまで埋めなければ気が済まない。そう簡単に埋まらなければ、装備やスキルを駆使することでなんとかそれを可能にしようと努力する。

そんな私の粘り強い性格が幸いしたのである。

「地下室に入つたとき暗くて何も見えなかつたので、置かれてた口ウソクにこれで火を点けたんですけど。ちゃんと揺れたんですよねー。1階の使用者部屋の口ウソクの炎は玄関のと同じで、風を吹き付けても揺れなかつたので。てっきり屋敷の中の火は揺れない仕様になつているのかと思っていたので不思議だつたんです。それに2階に上がる階段からエントランスを見下ろした時に、風見鶏は風上を向くものだよなあつて思つたら。もしかして、首が折れているの

はそういう意味なのかな、と」

風見鶏は、体が壊れて風の流れを読めなくなつた。なのに炎は風が吹いても知らぬふり。この屋敷の中には風向きを教えてくれるものはない。風向き、方向、方角、と。つまりそれは主人の居場所を指している？けれど一力所だけあつた、鍵のかかつたあの部屋は？2階に上がり、背後についたはずの階段がいつの間にか消え失せているのを目にしたら、何となく浮かび上がるその答え。

風を辿れば順路がわかる。順路を辿れば部屋の鍵が手に入る。鍵を得たならグランドフロアに下りられる。

要するにそういうことなのだろう。

「さすがベル殿なので」ゼル

「オレ達は入つてすぐ2階に駆け上がつたから、1階じや何も見てないしな。地下室があつたのも知らなかつたよ」

レプスさんとライスさんの言葉を受けて何となく恥ずかしさを感じて、少しあく田的の階段が見えてきた。

ちらりと背後を伺うと、喜色を浮かべた彼らの顔が目に入る。

ついでに勇者様のご尊顔を押もうとそちらの方へ視線を向ければ、いつも通りの素敵なお顔がそこにある……。

前を向き直し、ふはあつ、と止めた息を吐き出しへ。

？？そうそう！ そういうえばさつきのアレ！ 追っかけ始めて一番のレア顔よね！ ？ だつて今まで勇者様が笑つたとこ見た事ないもの！ 口角が上がつただけで神レベルの微笑みだなんて、笑顔になつたらこ

の世はどつなかちやうのかしら…？ つていうか、私がどつなかちやうんだるつー…やっぱり昇天？ これこそ生きてて良かつたつていうやつよね！ 地下室で透き通つた足が動いてるのを見た時は死ぬかと思つたけど、やっぱり入つてきて良かつたわ…！ きっとそのご褒美ねこんな体験一度ごめんこうむりたいけど、次があるなら2人っきりのシチュエーションで手を繋いでもらいたいものだわね！

さすがに前方を歩いているのでクネクネなんてできないが、私の脳内ではハートが激しく乱舞していた。

従つて、ついこのようなお約束の事故が起きてしまつ。

「ぬおつ…」

可愛いとは決して言えない声が漏れ、あると思い込んでいた廊下の高さを踏み抜けた足がおよそ20センチ下の板張りに、着地…。

? ? しないんかいつ… !

命の危機が迫ると走馬灯を見たり動きを遅く感じたりするというが、私の脳が「この高さの階段なら平気へーき大丈夫」とでも判断したのか、体感そのままのスピードで落ちて行くのが目に入る。

? ? 「これは痛い！ 絶対痛い！だから痛… ん？」

トンツという軽やかな着地音に思わず閉じた目を開けば、視界いっぱいに端正なお顔と揺れる黒が広がつて。どうやら抱きとめもらつたようだと、理解すると同時に届いた深い声音に、体の芯がゾクッとはねる。

「大丈夫か？」

「はつ…はい…いいいい…す、すみません…！」

それにしても勇者様！前から思つていたけれど、貴方はなんて優しい人なの…！

脳内でそんな歓喜の声を上げていると、普通に階段を下つてきたパーティメンバーが呆れたような声で言ひ。

「そりや、あれだけ怪しい足取りならね」

「…馬鹿だと思つ」

「前を見ていながら丸わかりだつたで、」やれぬよ。

「ははは。ベルはいつも面白いなあ」

？？なんすと…？

彼らの言葉に少し冷静さを取り戻した私は、名残惜しい勇者様の腕の中から氣合いで抜け出し、咳払いを一つする。

「では、いひらこなります」

仕切り直しに真面目な声で発言し、壊れた風見鶏を横目にしながら歩き出す。

目的の部屋はグランドフロアの最奥にあつたはずである。

前の世界のゲームや小説では、重要なイベントが起きた部屋は奥の方と相場が決まっていた。…まあ、ぶつちやけ一番手前じゃ雰囲気出ないし、そう簡単に辿り着けない場所に配置するからこそそのフレミア感な訳だから。

？？ああ。それにしても疎ましい。

簡単に想像できる後ろに控えたイベントに、己の口から思わず深

い溜め息が漏れた。

* · · * · · * · · * · · *

「おめでとう諸君つ

とびきり明るい声がして、背もたれの広い椅子の正面がクルリとこちらの方を向く。

そこに居たのは零を上下逆さまにして、しつぽのあたりをわずかに上向き修正したような、単純かつ見慣れた姿のホワイト・ゴーストその人（？）だった。

「ボクの屋敷はどうだつた？ 楽しめた？ ボクの方はその女の子がちょっととの物音で面白いリアクションをたくさん返してくれて、すごくすごーく楽しかったよ！ ボクの仲間も喜んでくれたみたいだし！ それにちゃんと謎解きしてここまで来てくれるなんて、君つて最高だなあ」

屋敷の主人は死んでいる、というテンプレを予想していた私は、かなりビビリながらさり気なく勇者様の後ろに構えてそつと部屋をのぞいていたのだが。なんと言うか、同じ「死んでいる」でもグロ方面とは次元の違う衝撃に、思わずぽかんとしてしまう。どうやら勇者パーティも言葉にできない衝撃を受けたようで、皆一様に口を噤んで指先一つ動かすことしなかった。

「まさか聖職者がまぎれているなんて予想外だつたけど！ もうつ！ 君のおかげで仲間の数人がうつかり昇天しちゃつたよー！」

まあ過ぎたことは仕方ないけどねー、と鈴をひらがしたような声

で言つ「ゴーストは、私からソロルくんへと向けた視線を再び私の方へ戻し、ふわりふわりとたゆたいながらこちらの方へ飛んできた。

「じゃー眞面目な話ー」「ゴースト・ハウス攻略のお土産に、この部屋にあるアイテムを一人1個持ち帰るのを許可するよーで、君はいろいろその鞄に詰め込んでたみたいだけど…」

「えつ！？な、なんのことでしょう？」

思わずスイーと逸らした視線に絡む事なく彼は言つ。

「まあいいよ。今は気分がいいから全部プレゼントー・わあいボクつて太っ腹ー」

白い体は声に合わせてポヨンポヨンと壁や天井を跳ね回り、備品に容赦なく体当たりをかます。これで姿が見えなければ立派なポルター・ガイスト現象の出来上がりである。なるほどあれはこういう仕組みだったのかと、やけに可愛い姿の「ゴーストを見つめながら納得していると、トントン、と肩を叩く者がいる。

「何ですか？」

言いながら振り返り、数秒硬直。

青白い顔の老婆の首が、三つ重なりそこに浮遊していたのだ。

その閉じられた目と口がゆっくりと開いていき、気味の悪い笑みを…。

「い…………やあああああああつ！？！？」

ガバリと手近な人の背に思いきり抱きついで、力の限り締め付ける。硬い何かにおでこを強く打ち付けたが、とりあえずそれを気に

するべきこの話じゃない。

「...?」

「 もやはははは！ ！ やつたね エルダリー三姉妹！ 狙つたところを
外さない君たちが大好きさ ！」

遠くの方でやたらテンションの高い声が聞こえるが、ガクブルな
私は掴んだ何かを離すまいと必死になつてしがみつく。

「済まないが」

? ? 無理無理無理無理絶対無理！ ！ ! 見てない、見てない！ 私何も
見てないし！ ！

「そこには刃物があるんだ」

? ? 幻想幻想全部幻！ 光の加減とか加減とか加減とかだし！

「怪我をする前に...」

? ? いやー、思い込みつて怖いなー！ ！ 思い込みつて怖いなー！ ！ ！

「.....」

? ? 思い込み.....つて。ん？

頭上で溜め息めいた音が漏れ、クスクスといふ声と共に頭をぽん
ぽん叩かれる。

? ? んん？ ?

「大丈夫？なんだかベルを見ると娘を思い出すなあ」

「某は孫を思い出したで」「やれる」

「…孫」

「じいさん、孫までいんの…？」

少年少女の問いかけに「レプス家は大家族で」「やれる」という聞き慣れた声が耳に届くのに気付き、ゆっくりと体の力を抜いて行く。そおつと視線を上向ければ、大きな手のひらで私の頭を撫でながら優しげな笑みを浮かべるライスさんが目に入る。この人は本当にいいお父さんだよな…と、いつか見た娘さんの姿を思い出しながら、なんとなく落ち着いた私は、顔にぶつかるヒヤリとする硬い何かが気になり始め、上げた視線を元に戻し…。

? ? 「うあ おおお！？」

回した腕をパツと離して後ずさる。

「すみません…」「めんなさい！許して下さい…不慮の事故です！」

そう叫びながら頭を一気に振り下ろす。

? ? 好きだからって不意打ちで抱きついたらダメなようにね…怖いからつていきなり背後から抱きついたりしちゃダメだと思つわけ…！？ぴつたりフィットの細い腰がそれはもう素晴らしい抱き心地だつたとしてもよ…何やってくれちゃったの私さん…？

土下座ものか!?これはもはや土下座の域か…?と身を縮こませながら恐々としている私の先で、低い声が気にするなという気配を含み「いや…」と漏れる。

「はいーじゃあそろそろお開きね　」

甲高い声のゴーストは白い体から腕っぽいものを作り出し、合わせてパン！と響かせた。

その瞬間あたりの景色は部屋から森へと変化して、いくつかの備品がポトポトと地面に転がった。

「お土産を選ばなかつた人はその中から持つてつてーあ、そうやつ。一番ボクを楽しませてくれた君には特別プレゼントを用意したよそれじゃ、ファンタム・ロードによろしくね　」

楽しげに笑う声が森中にじだまして、漂っていた白い霧がすうつと晴れしていく。

屋敷が佇んでいたはずの森の広場はいつの間にか消失しており、木と木の間と表現するのが正しく思えるような何の変哲もない場所で、呆然としていた私たちは次々と我に返つていつた。

行動一番をやつと物陰に身を潜め、狐につままれた感覚が抜けきらないという様子の彼らを伺つてみると、こちらの方に視線を向けて少年がぽつりと漏らす。

「なあお前、いつそのこと、このパーティに入つたら？」

その言葉に他の2人が振り向いて。

「ああ、確かにねえ」

「こつも近くにいるからこならその方がいいと黙つてので」

続く言葉に金髪の少女が「クリと頷くのを見て、ふと勇者様の方を見る。

物理的に無理がありそうな大剣を背負つた、記憶に懐かしい黒髪を持つイケメンさん。前の世界ではゲームや小説の中だけだったのに、この世界には当たり前に存在する“勇者”という職の人。始まりはほんの些細なミーハー心。それなのに、どうして人だかりをかき分けてまでその姿を見たいと思ったのか。今なら理由がよくわかる。

私はあの時、一目見て確信したのだ。

勇者クライス・レイ・グレイシス。

そう、貴方こそ私の運命の人なのだと。

? ? 大丈夫ですよ。

静かに佇む彼の瞳に、私はそっと微笑んで。

「お気持ちはありがたいのですが、私の居場所はこの位置なのです

今は、まだ? ? ?。

? ? だから安心して下さいね。勇者様、私はまだまだ待てますよ。

その瞳が語っていたから。

長期戦、もとより覚悟の上なのです。

* · · * · · * · · * · · *

勇者の嫁になりたくて。

異世界からの転生者、ベルリナ・ラコット 18歳。

す
大好きな人の隣に立てるその日まで、ゆっくり機会を伺いま

(後書き)

お…おかしいんです…

説明は極力入れないと前作のあとがきで誓つたはずなのに…
書けば書くほど細かい設定を付けたくなるなんて何かの病気じゃな
からうか。。

すみません…ほんとにすみません…（――（・・・（――（・

加えて今回の主人公の心理状態、漢字ばかりで読みにくいものが多くて申し訳ないですゝ（――）く切羽詰まつた様子を句読点なしで表現しようと思ったのですが…チャレンジング過ぎましたでしょうか？

真面目な本文のあとがきへいつの間にか消えたあの子の行方についてを書いておくと…

彼はゴースト・ハウスの周りを駆け回り、ときおり大地にじゅれつきながら、彼女の帰りを楽しげに待っていたのです。

だって命の危険なんか無かつたでしょ？階段のところはあの人に助けられてたし。

戻ってきた主人を見上げて首をかしげる仕草の中に、そんな声を聞いた気がしたのだと。

犬一匹でも側に居れば心強かつたかもしれないのに。ベルさん思わず○こです。

気がついたらもうすぐクリスマスなんですねえ。

クリスマスと言えばケーキ！ケーキと言えばロウソク！ロウソクと言えばアイツです！

そういう訳で、蛇足になりますが…

着火男：ちやつかおとこ

着火男：火種アイテム。某国の民芸品。素材、デザインは様々。ベルが所有しているのはX-Lサイズのミヤー人形っぽいやつ。名前はチャッキーさん。体長約15センチ。ボタンを触ると体の一部から火を噴くよ エ！？そんなどこからも…？場所はランダム設定です。

それから、もう忘れた方もいらっしゃるかと思いますが、新登場のレックスさんは爽やか系の短髪無造作ヘアです。いろいろ抜けてる小説ですが、そこだけは！そこだけは説明しておかないと！と思いまして。作者、男子は短髪の方が好きなので。。あ！でもですね！長髪好きの方のためにちゃんと長髪男子も用意しておりますよ！ただし、いつ出現するかわかりませんけど！だつて今回の話だつて出会い系の人物「ベリルちゃん ソロルくん 思い余つて第三者」と3回変わつてたりして！それに合わせてストーリーも3回変化しましたからね！作者の予定なんかちつともあてにならないんですよ！（もしも…ゴフツ）

ふう。（・_・）＝3

気を取り直しまして。

活動報告に数日後にヒョーすると金曜日に書いたのに（この流れだと土日のうちに上がるかな！）という雰囲気がじんでいるにも関わらず）こんなに時間がかかってしまい、お待ちいただいた方々には申し訳なかつたです…心の底からごめんなさい。

今回もここまで読んで頂き、本当にありがとうございます。
ではまた、機会がありましたら次話にてバ（・_・）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6124z/>

勇者の嫁になりたくて（ *) ダ 3

2011年12月20日16時48分発行